

## (前回) 第9回 山のトイレを考えるフォーラム記録(概要)

山のトイレを考える会

平成20年3月8日(土) 13時30分～17時30分

札幌市エルプラザ4階 中研修室 参加者: 56名

テーマ: 登山者が山のトイレ管理にどう関わるか～美瑛富士避難小屋にトイレを作ろう～

### 1. 開会挨拶 司会 上井博志

### 2. 代表挨拶 岩村和彦

昨年の4月から代表をやっている岩村です。最初に本来ならば一緒に活動しているであろう鈴木和夫さん、昨年の11月、カミホロの雪崩で亡くなった4名のうちの一人です。昨年の7月14日にくしくも鈴木和夫さんと一緒にカミホロ避難小屋トイレに注意看板を取り付ける活動をしました。非常に残念でなりません。

(ここで鈴木和夫さんのご冥福を祈って1分間の黙祷)

2000年6月に当会が発足してから8年目。一体どこまで山のトイレ問題がよくなったのだろうか。みなさんもそれぞれの思いがあると思います。私も私達が望んでいた山岳環境には、まだまだ程遠いと思っているのが実態です。ただ、少なくとも昔よりは、だんだんゴミは少なくなりましたし、山に行って使った紙はそのまま放置してくるのは、あたり前でしたけど、最近はかなり改善してきたように感じています。ただ、100%には程遠くまだまだです。

活動の当初は3～4年すれば、この会は解散できるのかな、と前代表の横須賀さんは考えていたそうです。そう言いながら8年目を迎えました。

本当はこの会は早く無くなった方が勿論いいのに決まっていますが、そのためにも、これから活動して行きたいと思います。それから今日、ここに集まりの皆様は、少なくともこういうことに興味のある方ばかり集まっていると思われまますので、今日、いろいろ思ったこと、感じたことを是非、皆様の所属する山岳会なり、関係機関に戻られ発信していただければ大変ありがたく思います。このフォーラムで有意義な時間を共有したいと思いますので、みなさま是非、発言していただけるようお願いいたします。

### 3. 2007活動報告 仲俣善雄(記録省略: 第9回資料集参照)

### 4. 講演1 横浜国立大学教授 加藤峰夫氏

(演題) 自然公園制度の「これから」—新・尾瀬国立公園を例として—

- ・ 現在は横浜国立大で環境法をしていますが、30年ほど前は北大の山スキー部。
- ・ 日光国立公園から分離独立した尾瀬国立公園は、日本の自然保護でも一番進んでいると

周りも言うし、尾瀬自身もそう思っている訳ですが、どういう状況かお話しします。

- 2007年8月30日、29番目の国立公園、日本で一番新しい国立公園が誕生した。尾瀬は日光国立公園の尾瀬地域としてもともと国立公園に入っていた。環境省は、環境省だけで管理するのは無理。地元の人達が使い易い、気に入るような公園とするにはどうするか。地元の人に手伝ってもらって気持ちよく管理する。独立させ、本当に自然と文化と地域がまとまった公園にして行こうと考えているみたいです。水芭蕉をあしらったシンボルマークを作って統一した。
- 大雪山の1/6～1/7の公園。そんなに狭くはない。日光国立公園の尾瀬地域に新たに編入されたエリアを含め、今の1.5倍ぐらいになった。標高1500m～1700m位に大きな湿原が広がっている。湿原の規模としては、釧路湿原よりはるかに小さい。雨竜沼湿原より大きい。至仏山での山スキーは楽しい。登山道が崩れゴールデンウィークが明けたら人は入れない。完全に雪が融けるまで誰も入らない。燧ヶ岳と至仏山に囲まれたこの白い部分が尾瀬ヶ原、尾瀬沼。バスはこの峠まで行く。山を下ると尾瀬湿原に入る。30分～1時間弱下ればいい。入り易い。至仏山は花の百名山とも言われる。尾瀬草、蝶、虫、東京から2～3時間でかなり自然が残っている。尾瀬は本州の中でも登山道、特に木道、トイレ、山小屋が非常に充実しており、整備されている所だ。木道は登山者のためというより、登山者、利用者から自然を守ると言うことで、木道を一生懸命整備している。木道は関係者により毎年、補修整備、改善している。快適になっている。
- 東京電力のマークが木道に刻印されている。尾瀬というのは、実は東京電力の山。日本の国立公園、自然公園は人の土地でも何でも公園にするという制度。民間の土地が日本の国立公園の1/4入っている。環境省の土地は0.2%か0.02%か忘れたが、ビジターセンターとビジターセンター隣の駐車場だけ。北海道の国立公園は林野庁の土地が殆ど。
- 尾瀬はもともと東京電力がダムにするつもりで持っていた。尾瀬が日本の自然保護発祥の地と言われるのは、明治の中ほどから何とか国を強くしなければならぬ。その為には、電気だ、水力発電だ。尾瀬全体の盆地をダムにして大規模な発電所を作ろうという計画があった。東京電灯が国から譲り受けてダムを造るはずだったのが、あんな美しい場所にダムを造るのはおかしいのではないかという人がいて、意見対立が起きたのが、日本の自然保護の最初だったと言われている。東京電力は20年ほど前にダム造りはさすがに諦めた。10年ほど前に決定。東京電力が自然保護の代表である尾瀬を守るために多額のお金をつぎ込んで、国立公園尾瀬のスポンサーになって、尾瀬の木道を造り、自然保護に協力している。旧尾瀬の7割が東京電力の土地。残り3割は国有林。
- 尾瀬国立公園は多い年で年間60万人が訪れる。最近では30万後半から40万弱。環境省が中心となって相当しっかりしたトイレを数箇所用意した。手洗い場も相当綺麗。へたなデパートのトイレより綺麗。環境省の補助事業から始まり、それ以降もどんどん手が加えられています。管理者の「尾瀬保護環境財団」というのは、群馬県、福島県、新潟県及び東京電力がお金を出しあって作った「尾瀬を管理するための財団」です。国は財団を作る時にはお金を出せない。環境省も相当関与しましたので、財団には、優先的にいろいろな仕事を下ろして財団の活動をバックアップしている。
- 利用者の側にも協力をと言うことで、尾瀬は上高地と並んでトイレ利用にチップ制度を取り入れた。できれば1回100円くらいをお願いしますと呼びかけている。尾瀬のト

イレは相当のエネルギーを使って水と固形物に分け、固形物はヘリで搬出。子供でもお金がかかることが理解できるような説明を看板でしている。

- 尾瀬の山小屋のトイレは、しっかりした合併浄化槽を作ることが義務づけられていて、排水のレベルもいつも調べられている。16軒ある山小屋トイレの半分ぐらいは相当立派です。もう山の中にある旅館ですね。歩いてしか行けない旅館。よほど人が多くない時ですと、風呂にも入れ、ビールもお金さえ払えば買える。そういう意味で非常に快適な山小屋（宿泊施設）で、登山が初めての人でも十分に尾瀬を楽しむことができるようになっている。
- 特定日時、場所への集中、オーバーユースというのはどうしても起こる。反対側を歩いて行けば殆ど人がいない。バス、行動パターンが決まっていて、どうしても集中する。木道が整備されたので、1日何万人こようが山は荒れなくなった。ただ、1日8000人を超えたら登山口から入れないことは分かっている。1日4~5千人だとちょっと混んでいる位かな。尾瀬の一番多い時には1日に2万人を超えるのが数日、1万人を超えるのが10日以上ある。1万人を超えたらバスを降りた途端に身動きできなくなる。登山道に入れない。登山道に入るまでに30分~1時間待つ。しかし殆どの時、尾瀬はいつも空いている。いつでも快適に楽しめます。混んでいる時は雨でも何でも混みます。バスが動いている限り来るので、水芭蕉と紅葉季節の休日だけ混む。春でも秋でもちょっと時間をずらせば空いている。
- アヤメ平の植生復元への努力について話します。アヤメ平は秋でも初夏も非常に綺麗な場所だった。木道が整備される前、昭和30年代の登山ブームで、もの凄いたくさんの人が来て、この湿原の上で弁当を食べてピクニック。バレーボール、キャッチボールを盛んにやった。その結果ここの植生がぶっ飛んで粘土地になってしまった。40年前の話。それから延々と管理している尾瀬林業（東京電力100%子会社）が、社長をはじめ全員長靴を履いて、地元の人と協力して何とか緑を取り戻そうと一生懸命考えた。そこらへんにある種を採って種を蒔き、その上に藁をひいて、また藁を風で飛ばないように竹の棒で押さえた。これが分かったのが20数年前。それから延々と周りから攻めていって少しずつ植生を回復させていった。「アヤメ平の緑を取り戻すために」という東京電力の看板がある。40年かかっている。
- （至仏山の登山道崩壊について）至仏山は百名山。多い時に1日千数百人登る。蛇紋岩で脆い。高山植物が吹き飛んでしまった。あと一体どうするんだと。平成になるちょっと前から関係者が取り組んでいる綺麗な山だが、登山道が崩壊してしまった。登山道が山の一番弱い所、歩き易い所を通っている。関係者が平成元年~7年まで山を閉じて階段木道を造った。この上にしか歩かないでと。ところが至仏山は雪が多くて、春先雪解け時に大量の雪がずり落ち、そのため木道が全部外傾してしまって、濡れると滑る。外傾した階段なので、もの凄く怖い階段になる。下りは歩けない。木道外を歩いて山が崩れ、回復はなかなかしない。残雪期が一番インパクトが多い。この山はゴールデンウィーク明けから完全に雪がなくなるまでは、入らないでくださいと呼びかけている。登りだけで、下らないようにしてくださいと呼びかけている。コースとしては、至仏山を登って下って、尾瀬ヶ原を歩いて、燧ヶ岳を登って下るとというのが一番合理的なコース。そもそもここに登山道を作ったのが無理だった。今は何とか下らないでくださいことを

ルールに出来るが、環境省はみんなの呼びかけで何とかできないかと。弱い所に登山道を作ると、水の流れも変わって、人が通らなくても登山道があるだけでなかなか自然が戻ってこない。他にいい場所があれば付け替えるか検討している。

- (まだまだ山積する重要問題) 登山者が行き易いので、無理しての死亡、熊に遭って怪我する事故、木が落ちてきて死亡する事故が最近2件。1日、数万人だと確率が高くなりいろいろな事故が起きる。このような問題にも対処しなければ管理者の責任になる。生態系保全では、入口で足に付いている種を落とす呼びかけをしている。ツキノワグマがよくでる。北海道よりも熊に遭遇する。
- (尾瀬ビジョン) どんな尾瀬を誰が計画して、その計画に基づいて誰がどのように、例えば山の管理、熊の管理(利用者への情報提供)、必要なお金を誰にどういうふうに求めていくのか、尾瀬を独立した公園にしようねと言うときに、みんなで「どんな尾瀬にしようか」と言うビジョンを環境省も一緒になって作った。これもなかなか合意するまでに時間がかかったが、大きなポイントは4つ。木道等々を作るにしても、いろいろな状況をできるだけ情報を集めて化学的な理解を深めてやろうね。尾瀬と尾瀬国立公園の内部だけではなくて、その周辺を地域の人々と一緒に保護をして、しかも保護だけでなく賢明な利用を考えていこう。保護と利用が対立しないよう、利用の基礎には保護がある、保護の目的には利用がある。それをはっきり意識して保護と利用を一緒に考えよう。それを尾瀬だけで完結させるのではなく、尾瀬ではこんなことをやっていますと、尾瀬から広く日本中、世界中に発信し、また逆に発信の結果として、尾瀬に関心を持つ多くの方々に尾瀬の困っている面を手伝ってもらおう。みんなに尾瀬のサポーターになってもらおう。このような大きな4つの柱を立て、環境省、福島県、群馬県、新潟県、栃木県、その中の市町村、尾瀬保護財団、東京電力、尾瀬林業、林野、山小屋組合等みんなでスクラムを組んでやっていこうとなっている。尾瀬ではいろいろなレンジャーが頑張っている。レンジャーは尾瀬保護財団レンジャー、環境省レンジャー、東京電力レンジャーなどボランティアを含めていろいろな方々が尾瀬の公園管理に協力しておられる。
- 日本の国立公園制度は今後一体どうなっていくのか。日本の公園制度の基本的な性格、そしてみんなで守る、みんなで管理するとはどういうことなのか。さらにみんなで守るためには、みんなの中でどんな仕組みを作る必要があるのかということ。日本の国立公園制度は人の土地であっても何であっても関係ないから、ここは守った方がいい、この風景を末長く残すべきだと言うところに環境省が公園と言う枠をかけて、その中で大きな開発を規制する制度。ですから日本の公園というのは、開発規制の地域です。アメリカ、カナダの国立公園は全然違って公園目的のためだけに公園管理のためのお役所が管理する。このエルプラザみたいなのがアメリカ、カナダの公園です。エルプラザは札幌市が土地も建物も管理する人も用意して、みなさんのいろいろな社会活動をサポートする為に作った。札幌市が利用ツールを作って、みなさんに守りなさい。ルールを守らなければ使わせないと言うことができる。日本の公園はそうではなくて、人の土地、みなさんの土地に開発、今までと違うような大きな開発はしないでくれ。今までやってきたことはかまいません。なぜかと言うと公園になるまでに、皆さんがいろいろな事をやってきても、大雪や知床や尾瀬は綺麗だったから。規制をかければ風景は残る。しかも風景が綺麗だったところは、もともと観光地になっているから、別に利用のためのこ

とは何も考える必要はないと。規制をかけることだけで成り立ってきているのが、日本の自然公園、国立公園制度です。ところが、今までの5, 60年は規制をかけておけばそれでよかった。山小屋があったり、キャンプ場があったり、山小屋やキャンプ場のない所に入っていく物好きもそんなにいなかった。だから山はそんなに荒れなかった。自然にもっと深く触れたいと言う人が増えてくると、きめ細やかな環境保護、自然保護をやっていかないといけない。画一的な開発規制だけでは済まない。ところがきめ細やかなことをやろうとすると環境省あるいは都道府県の公園管理行政では力が足りない。環境省がいくら一生懸命やっても絶対的に人と金が足りない。環境省も日本の自然公園、国立公園は新しい世紀では持たないなど。せつかくここまでアメリカ、カナダとは違う形で、世界の中ではかなり注目されるタイプの公園管理、公園運用をやってきたけど、そろそろ壁に突き当たった。で、どのようにするかと言うことで、去年の3月にかなりしっかりした報告書ができました。公園管理をもっと科学的にやろうねと。どの公園では何を提供しよう、どんな自然、どんな楽しみ方を提供しよう。そのためには、どこまで自然を使ってもいいんだ、どこからは自然を少し労わるのかと言うことを科学的に考える必要はあるねと。そのためには、いろいろな人達の協力が必要でいろいろな人達、つまり地域の人達の協力をもっと積極的に得られるようにしなければならないねと。公園周辺の人たちが、公園が自分の故郷にあって、自分達の住んでいる場所にあってよかったねと思えるような公園にしなければならないねと。

- ・ (自然公園法を補完する諸制度) 自然解説とかガイドとかアメリカ、カナダの公園でしたら公園を利用するためのインフラ、絶対に必要な条件と言うのを、日本では、公園を管理する行政、国や都道府県は用意してこなかった。しようと思ってもできなかった。お金にも繋がらないし、規制とも違う。例えば情報提供、汚れてしまった山を綺麗にする、みなさんが一生懸命やっているような活動や安全指導。アメリカ、カナダの国立公園では一番重要だと言われるレンジャーの活動の中心になっているような事は、日本では公園管理からは殆ど抜け落ちている。やらなくても地元の環境産業がやってくれる。細かな生態系、鹿が増えすぎてどうするとか。北海道の山で多いような雪崩対策とか。スノーモービルを効果的に禁止するにはどうすればいいか。こういう多くの人とお金を使うような話はやろうと思ってもできない。で、そういう状況の中で、どうすれば公園を中心とする日本の自然を保護していけるかと言うと、国立公園あるいは自然公園法という制度だけでは自然保護は完結しないんだと、みんなが分かってきた。地域の人達、NGO、NPOなどの協力が絶対必要だと。今までの自然公園法でも地域の人達が自然保護に参加してはいけないと誰も言っていない。日本の制度、実は開発規制と言うそのルールに触れない限りは誰が公園を守るために何をやろうと自由。逆に公園を守るためにいろいろな人達がいろいろな活動をやってくれなければ公園は維持できないし、多くの人達が、例えば大雪山での自然保護を少し意識してみようか、あるいは札幌周辺の自然地域を少し綺麗に使いやすく楽しくするための活動をやってみようかと、個人の立場、NPOの立場、行政、企業の立場で考えてくださるならば一気にアメリカやカナダの公園よりもレベルは高い公園になる。現に日本の公園はそうなっている。環境省が手間暇かけなくても。かけようと思ってもかけることができない訳ですけど。自然公園法を周りからサポートするような制度を一生懸命に考えていく必要がある。都道府県、市町村

はそれぞれの地域の法律、条令を作ることができる。その条令によって国の制度ではできないような、もう一段厳しい規制であったり、利用者サービスであったり、あるいは必要な設備にお金を出す。そういうことを決めることもできる。あるいは、公園の一番の地主である林野庁が、自分たちが提供する土地（国立公園）で多くの人達が楽しんでいるんだということを正面から認めて、そのために必要な対策をとるようになってくれば、例えば大雪山のレンジャーが6人？ぐらいですが、林野庁の職員の方々は数百人規模でいます。その方々が林業の仕事の一部を公園管理だと思って、例えば自然保護のための情報を集めるとか、利用者に対していろいろなアドバイスするとすれば、大雪山の公園管理のレベルは一気に世界一になる。

- ・（利用規制について）利用規制は自然公園の国の法律ではできない事になっている。でも都道府県、市町村がルールを作ればできるはずですし、地主が俺の山に入れてやらないと言えばそれまで。至仏山は5月GW明け～6月末まで入らないでくださいと呼びかけているが、殆どの人が協力してくれる。山の地主は東京電力。東京電力が人を入れないように法律上はできる。
- ・（利用者負担）国の法律では、まだ徴収できない。徴収できるような制度になっていない。人の土地に入るのに国がお金をとることは何事だと。しかし、地方自治体レベルで、どこそこの地域を守るために北海道は努力しているのだから利用者から利用料をいただきます。これは出来る。協力金は利用料。北海道では、無視することはできるが、屋久島では、協力金と言いながら、大きなゲートがあって、そこに人が張り付いている所もある。お金って非常に厳しい話ですが、どこで、どのようなルールでお金を取るか、みんなで真剣に考えると結構合理的な道はあるものです。

（ガイド資格）環境省の持っている管理している法律（自然公園法）では、公園の中を管理するガイドの資格は決めることはできないと勝手に思い込んでいるらしい。民間の仕事に口を出すことはできない。私は間違いだと思う。たとえ環境省がガイド資格の議論ができないとしても都道府県、市町村はうちの地域ではガイドにはこのぐらいの能力を要求すると言えるのではないか。しっかりとしたルールを作ればいい。北海道がガイドについてしっかりした教育をして、本州からわけの分からないガイドが来た時に排除できるのではないか。例えばですが北海道が道州制になったら北海道で1シーズン自然を経験した人でないと北海道のガイドはできないルールを作る。これは別におかしなことではないか。南の小笠原では、小笠原の人でないとガイドになれないと言うルールを事実上作っている。この春からさらに「エコツーリズム推進法」が動きだします。これは地域、時に市町村単位でそれぞれの市町村のエコツーリズムを発展するルールを作りなさいと。いいルールなら国がバックアップしますとハッキリ言っている。やる気になれば日本の自然公園、多分ほかの国の公園制度より、いろいろなことができる。法律自体もそうなっている。いろいろな法律を組み合わせると言う制度になっている。公園管理に協力しようと言うそれを仕事にしようとする方、あるいはボランティアで、あるいは自分の楽しみの一環としてそういうことに関わってみたい方が非常に増えてきているのが今の日本です。問題は多くの方々が大筋で一致すること。例えば知床だと熊の世界にみんなでお邪魔しようと言う世界遺産を作ろう、大雪山は、夏は高山植物、冬は雪山を楽しむようにするのだと言う合意でもできれば、多くの人達の力をそちらに向けて、いろいろと組み合わせたい

くこともできるのではないかと考えている。

## 5. 講演2 日高山脈ファンクラブ事務局長 高橋 健氏

(演題) 幌尻岳のトイレ問題とその対策

※第9回フォーラム資料集に詳細に書かれていますので、記録は省きました。

## 6. デスカッション コーディネーター：岩村和彦

(横須賀) 幌尻山荘のバイオトイレ期待していた。ただ、黒岳のバイオトイレの件があるので、順調に動くのかと。利用者数、気象条件、地理的条件、水が供給できるか、発電機の大きさが適正なのか、総合的に考えられた上で設置できればいいなと思っていた。ところが見事に外れているのですね。トイレが設置される前の事前調整が非常に短期間だった。それは黒岳のバイオトイレも同じで、黒岳は1日の利用者が最大200人と想定していたが、800人となった。バイオトイレの機能が、発電機の容量だとか蓄電するものが無いだとか、風力発電があまりにも風が強い所で壊れたとか、ソーラーが充分機能していたとしても蓄電池が無いために働かないだろうとかが、分からなかったのですね。多額の予算をつぎ込んで、幌尻も黒岳バイオトイレもやっぱり、うまく稼動していない訳です。非常に大きい金額なので、やっぱり惜しいなあ。この事前調整について日高ファンクラブの方は、どのような方法が一番事前調整し易いのか、例えば、そこに参集する方々の団体とか、具体的にこんな人が来るといいねと言う話をちょっとお聞きしたいのですけど。

(高橋) 黒岳ほどではないのですけど、確かにうまく稼動していない様に今の所は見えるのですね。ただ、バイオトイレについては、1回、入れ替えているのですけど、私の感触としては、うまく動いている気がしている。何が問題かと言うと、幌尻の場合は1基しか設置できませんでしたから、どうしても利用者が集中する時間帯では、1基で間に合わない。そのために仮設トイレを設置して、今までよりも汲み下ろすことを考える、今までは地下浸透式で土壌には影響があるのですけど、水分が地下に浸透していた分、大便しか担ぎ下さなくてよかったが、今度は貯留式仮設トイレになって水分も担ぎ下さなければならぬと言うことで、本当は仮設トイレに入っているものをバイオの処理層に入れて分解しようと言う目論見があって、何回か実験的にやったのですけど、それをするとどうしてもバイオがうまく働かないと言うことで、目論見は外れてしまった。

水力発電については、今1.5kwの出力が得られていますので、1基であれば700Wぐらいでいいので、問題なく稼動しています。しかし、基数を増やすと現状では無理。やはり事前調査が不備というか、結局、お金をかけるのであれば、はっきりと基数を決めて、それに対処できる電力設備を設置すべきだと思うのですね。やはり経費の大きなウェートを占めているのは、へり代なので、またこれを運ぶとなると二度手間になりますよね。予算が当たってしまったので、これが幸か不幸か。予算が幌尻にこないで、どこかの山岳地バファゾーン事業に使われていれば、その間、日高としては検討をもうちょっとやって、まあ、町の単独予算で貯留式が設置されて、5年後を目途にと当時は言っていましたから、その5年の間に検証して、どういうバイオトイレが必要かと検証ができた、今となってはそう言えるのかなと思います。

(藤井) バイオトイレの話、なぜ、自己完結にならないのですか。つまり糞尿を運ぶとお

っしやいましたが、なぜ、そこで全部処理できないのですか。技術的に可能なのです。有機物を全て分解して、その過程で全部蒸発してしまう。そういった技術が既に確立している。それを知らない行政…？レベルが違うと思いました。

(高橋) バイオトイレはその場でキチント処理されています。バイオトイレのほかに工事現場用の仮設トイレが2基設置されています。同じ時間帯に登山者の利用が集中するため、バイオトイレは1基で足りないので、仮設トイレを使って貰っています。

(藤井) バイオトイレを増やしたら問題は解決するのではないか。

(高橋健) そうですけど、今、1000万円をかけてバイオトイレを設置しましたから、あと何千万円か分からないけど、お金をかければ確かに解決されるのですけど、それを誰が負担するのかということです。

(岩村) 資料集に書いてありますけど、本来は2基設置する予定だった。それがヘリ代にかなりお金がかかり、限られた予算の中で1基になった。昨年、私も幌尻山荘のウンコ担ぎに行き、バイオトイレを見たんですけど、確かに見た感じだと私は素晴らしいなど。中のオガクズも…、まあ、あれはハッキリ言って、管理人さんが相当気を使って管理してくれているから、あの状態だったのでしょ。50人～90人の宿泊者が一斉に朝トイレに行ったら、あのトイレ1基じゃ全く持たないなど言うのかよく分かりましたので、仮設トイレを併用せざるを得ない。ベストでないにしても、現状のところと言うと併用せざるを得ないと感じた。

(岩村) 利尻は携帯トイレで、全国的にも先駆的な位置づけになっているのかと思いますけど、そこで稚内の自然保護官の岡田さんに、新しい利尻の利用ルールについてお話をさせて頂けたらと思います

(岡田) 稚内の自然保護レンジャーの岡田と申します。利尻山登山道等維持管理連絡協議会が2月に出しました「利尻山登山ツアーを実施する際の配慮事項」というのについて紹介させていただきます。表と裏があり、表についてなぜ、こういうのを出したかと言うと、実は背景に利尻山の登山道浸食があります。深い所では、人の背丈以上に掘れた登山道があります。その原因が、同じ時間帯に同じ場所への登山者の集中が原因になっている。人の集中が裸地を作り、その裸地が雨によって浸食をさらに加速させている。また、弱い土壌がある。人による影響を少しでも減らそうと言うのが、この配慮事項の内容であって、そのための方法論として、まず一つに一番影響の大きい、登山ツアーに対してご協力願おうと。その方法として、一つは、1グループの人数、1パーティの人数を適正化して欲しい。ツアーに対して募集段階から利用ルールを事前案内して欲しい。そして実施前、登山開始前に再度、案内してもらいたい。また、登山中に至っては、リーダーであるガイドさんが利用ルールを普及していただきたい。これによって人為影響による登山道の浸食は少しでも減らそうと言うのが狙いです。

(岩村) 岡田さん、ありがとうございます。利尻富士町役場の住吉さん、補足をお願いします。

(住吉) 私は利尻生まれ、利尻育ちです。山があり、海があるのは当たり前の環境で育ちましたが、今までは山にはあまり登ったことはありません。この仕事になってから登っています。私は「利尻山登山道等維持管理連絡協議会」の事務局をやっていますが、岡田さんが申しましたとおり、利尻ルールを徹底周知していきたい。補足ですけど、旅行業ツ



アー登山協議会と言うのが全国にあり、そこの事務局にもパンフを送っています。道内のアウトドア協会会員の皆様にも送っている。山岳ガイドさんにもこれから情報提供したい。

(岩村) 利尻では初め携帯トイレを無料配布していたが、途中から有料になりました。この1～2年の携帯トイレ利用状況はどうですか

(住吉) フォーラム資料のP103からトイレ対策について載せています。携帯トイレは平成16～17年無料、平成18年から有料化しました。観光はH14年がピーク(25.6万人の入れ込み)に右肩下がりに落ちている。H19年は20万人を切るのではないかと。登山者数は1万人弱で推移しており、あまり減っていない。18年4946個、19年は5644個の販売数。回収率はH18年48.4%、19年は38.3%と落ちているが、販売数は伸びていることは、登山者の認識が高まっているのかと。登山者一人一人の環境への配慮だとか認識が向上していると捉えている。資料の中にもありますけど、携帯トイレブースもテンド式→FRP一体型→木造組立式と変えてきている。既存の携帯トイレブースが破損したり、老朽化が激しいため、環境省さんの直轄事業で頑丈な木造組立式の携帯トイレブースを配備した。経費については、資料P106を参考にしてください。

(岩村) ありがとうございます。今は木造に全てなっているのですかね。携帯トイレの投棄などの問題は起きていませんか。

(住吉) 有料化されてから投棄が懸念された。全く無いとは言えませんが、思ったより少ないのかなと。山岳会等で年何回か清掃登山をしてゴミの回収をしている。

(岩村) 当会でも会員により携帯トイレに対する考え方が区々ですけど、少なくとも現状は携帯トイレだけでOKだとか、トイレ設置で全て解決するとは感じていません。それぞれ山の環境とか高さとかに応じて、併用なりを考えていかなければならないと考えています。当会の仲俣の「美瑛富士避難小屋に似合うトイレの再々考」と題して資料に載っていますので、説明をしてもらいます。

(仲俣) 第7回と第8回のフォーラムに引き続き、第9回でも美瑛富士避難小屋に似合うトイレについて更に考えました。P111の絵を見てください。便器は和式で固液分離、ウンコはカートリッジに貯留してヘリで運ぶ。本州の山小屋と違い、利用者数が少ないので、500ℓカートリッジで10年はもつのかなと。尿は土壌処理。第8回で土壌面積が少なくて済む「人工土壌ボード」を提案しましたが、メーカーが継続してボードを提供してくれるか不安もあり、本州の山でかなり実績のあるリンフォースさんの土壌処理がメンテナンスが難しくなくいいのかなと。リンフォースさんの中台会長さんに聞くと、土壌処理面積も幅1m、長さ2mぐらいあれば綺麗に浄化して垂れ流ししても問題ないとのお話でした。昨年講演していただいた、槍ヶ岳山荘の穂苅さんが営業している宿泊者定員が150名の大天井ヒュッテ(北アルプス)は、固液分離、大便はカートリッジ貯留でヘリ搬出、小便は土壌処理で清水にして流しているとのお話があります。P111を見ても分かりますが、第9回では換気ファンや照明に使う電気をソーラーで発電する設計でしたが、今回は止めました。なるべく機械部分が無いトイレにしました。あと管理主体が決まれば、それほど専門家でなくとも登山者で清掃ができる仕組みにすると、管理主体に負担がかけずにできるのではないかと考え私案を考えました。清掃用の雨水貯水タンクを設け、便器の汚れ、特に小便で尿石が付くと汚いので、清掃ができるようにしたいと思いましたが、当会の小笠原さんから、蚊とかボウフラが湧くとこの指摘があった。なるべくメンテナンスの

かからない環境配慮型のシンプルなトイレを更に皆様や専門家のアドバイスを得ながら考えていきたいと思っています。

(岩村) 幌尻山荘の話もありましたが、電気を使うとか、何を使うとかになると、厳しい山岳環境では、結局メンテナンスが大変になる、仲俣さんの案では、設置してから故障修理とかが極力生じないシンプルなトイレになったんだなと思います。

(仲俣) 実際に北アルプス涸沢の公衆トイレでこの方式を使っていて、少し違うのは、土壌処理した清水を地下浸透にしないで、雨水とともに溜めて、それを足踏みポンプで上げて、簡易水洗として使っている。山小屋は2つ、野営地が一つあり、公衆トイレが2つある。ここに最大1日3000人が泊まる。スケールが違います。

(岩村) 環境省はトイレ設置に前向きだが、維持管理は委任したい意向。登山関係者内には維持も含めた国等の管理が必要との意見も多い。当会では本年1月に関係機関・山岳会等にアンケートを送付した。趣旨などを当会の小枝より説明する

(小枝) 先程加藤先生が講演されたように、これからは共同・共生を考えながら進めてゆく必要があるだろうと考える。環境省は三位一体改革の下、国立公園の管理は省直轄の方針を発表した。美瑛富士トイレも整備計画内に含まれている。設置は省主体で進めるが、維持管理についての考えを明確にしてほしいとの要望があった。明確化すれば整備が具体化しやすいと聞いている。これまでは地元山岳会主体での管理を考えていたが、地元の方々だけでの維持は難しいのが現状。他地域も含めた山岳団体・登山者・ガイド等の協力により清掃を分担することはできないか、アンケートにて意見を頂いた。結果を整理中だが、フォーラム参加の皆様、維持管理の分担が可能かどうかぜひ意見を頂きたい。

(岩村) 大雑把ではあるが週一回の清掃だと、4ヶ月で16回。16の団体・個人による協力があれば、美瑛富士トイレの維持が可能ではないかと考える。

(藤井) 我々は憲法で文化的生活を保障されている。登山も同様で、維持管理の費用は国が負担すべき。無駄な税金の使い方を止めれば、費用のねん出は容易なはず。権利を有しているのだから、保障を強く求めなければならない。

(岩村) 維持管理も含めて、国が負担すべきとの意見ですね

(加藤教授) 国が負担すべきとは考えるが、それでは先に進まないのが現実。我々がすべきは、環境省・林野庁が財務省から予算を認められやすいように、バックアップする。そのためには現状の用途の不備を指摘し、より良い予算の使い方を提示するとよいと思う。現状の予算を調査し、どれだけ予算を追加すればよいかを、マスコミを使って公表してはどうか。山岳会も含めて市民がボランティアで維持管理に協力するのは厳しい。ガイド資格保持者にインセンティブを与えると同時に、清掃活動等の参加も資格維持の条件としてはどうか。

(藤井) やはり、健康的な生活保障は義務であり、国が負担すべきと考える。

(加藤教授) 海岸の清掃も国・自治体が負担すべきとの声がある。また道路整備の要望も根強い。しかし全ての要望を税金で賄えるのか

(岩村) それぞれの立場・考え方があり、要望があること自体民主国家である以上正当である。しかし、今回のフォーラムで考えたいのは、意見を持つだけでは状況の改善は早急に見込めず、どうすれば前進できるのか。

(横須賀) 美瑛富士トイレ問題の検討は5年になる。署名は3ヶ月で2万7千筆集まった。

作りたい要望の強さを実感し、具体策を模索した。国が負担すべきとの意見もあった。しかし、国の実施を待っていたら、いつになるかわからない。

登山者としてできることはないか、協力できることはないかを考えようとの、方向性を得た。国や登山者などそれぞれが、やれるべきことをやるのが良いと考える。

(福岡：北海道庁) 行政側も予算がなく、出来ることが限られている。山岳環境を改善する方向で、実施できるものからやっていく。

(大道：上川支庁) 皆さんがご存じのように、バイオトイレ等で必ずしもうまくいっていない。しかし失敗をもとに改善策を検討している。一般登山者からの協力申し出も頂き、我々の励みになっており関心の高さを感じている。行政・市民の皆さんの共生が重要と考える。

(小笠原) 万計山荘は築45年で、空沼岳登山道途中の万計沼畔にある。林野庁から管理委託を受けているが、補助はない。トイレは当初浸透式で、沼には大腸菌が多かった。市民から浄財を集め便槽を導入し、EM菌を散布する、風通しを良くするなどの対策で、3年で大腸菌・悪臭・蠅が激減した。トイレ脇に募金箱を設置したところ、年間20万円程度募金があった。山荘裏まで林道が通じ、バキューム車が入れたが、林道が崩壊しつつあり、今後もバキューム車が来れるかどうか問題となっている。トイレを設置するならば、きれいな、快適なトイレを作って頂きたい。EM菌は有効である

(内藤：美瑛山岳会) 今回環境省が設置して管理は地元がやらなければならないとは思っているのですが、高齢化していたり、大雪のあり方を検討する会の中でもそれぞれの登山口を持つ自治体の垣根を越えて大雪を管理していくと言うのもあるが難しい。美瑛の場合も小屋の管理について会員から不満の声も出ている。ただ、山のトイレを考える会の愛甲さんとも話をしているなどという実感もある。美瑛富士の避難小屋の内部も湿気でカビが生えたりしてあと何年かで穴があくんじゃないかと心配もしているが。われわれも年に2回くらいいくのだが、使い終わったボンベや水の入ったペットボトルを次の人のために残してくれるのは困る。降ろしている。登山者がきれいに使ってくれ掃除もしてくれるのはありがたい。

(金井：秀岳荘) 山のトイレを考える会は以前から資料では知っていたが、参加するのは初めて。トイレ問題の解決もすすんできているなど感じました。私たちもお手伝いできることがあれば協力していきたい。

(栗原) 基本的に国がやるべきだと言う意見もあったが、そんなことを言っても先にすすまないですから、山というのは遊びですから、楽しんでる人がまずやるというのが基本なんじゃないのか。個人的にはただ山に登っているより、トイレ掃除は楽しい作業ですから特に汲み取りはスリル満点ですからぜひ参加してください。

(高橋) 山岳会や登山団体に管理をお願いすると言う部分ですが、私自身も山岳会に入っていますがほとんど役場職員の会員で作られている。今は高齢化で、町内の登山道の整備や町民登山会をやってきたんですが、できない。じゃどうするか、役場でできないかと言うことで、「日高山脈登山会議」を立ち上げて登山道の整備をやることになった。その中には日高支庁、森林管理署、日高町役場、北海道山岳連盟が参加している。役場の立場からはできれば登山者の方に登山道整備をやってもらいたいということで土日に設定したが、実態は役場職員と森林管理所の職員しか協力してもらえなかったということがあります。

もともと行きたい山があるのに拘束をして今週は登山道整備やトイレ掃除をしてくださいと言ってもどれだけ協力してもらえるか難しいんじゃないか。それより山のトイレを考える会に入ってきた方とか小屋を利用した方とかにお願いしたほうがいいのではないかと。

(横須賀) それはそうだと思う。ボランティアってつらいものとか純粋な理想のためにやるというより楽しんだほうが勝ちですね。外国でもここに来た人は道路の補修ももするんだよと石を担がされたり、そういうボランティアって世界にけっこうあります。トイレを作ってその管理主体となったらたぶん年に一回くらい「オプタテシケに登ろう」ツアーをやってそうやって募集すると「わー行けるんだ」という参加者が集まるかもしれない。そのときにトイレを清掃してもらってこういう管理は市民がやっているんですよと実感してもらおうのも楽しくて勉強になるツアーだと思う。

(高橋) ガイドの方々にそういうツアーをやっていただけると美瑛富士の問題も本州の方に流れるし、いいのかなと。

(横須賀) 去年は高原温泉の登山道補修に山岳ガイド協会として46名が参加して、ガイド協会も少しずつボランティアしよう機運が上がってるんで議題にあげようと努力しようと思っている。

(加藤教授) 協調共同と言うのは大事でそれをしないと日本の国立公園自然公園は持たんとは思いますが、ただ、協調共同ということで環境省や林野庁といった大きな行政主体が逃げてはいかん思うんですね。レンジャー個人個人が一生懸命やっているのはわかるが、国の組織として環境省、林野庁、北海道などの大きな行政主体がやるだけやってもやっぱり人の土地なんだからできないんだよとかね、自然公園の管理にはこれだけお金がかかるという話になってきて、じゃあ関係業者ガイドさんとか地元の人たちが純粋ボランティアでというのがスジだと思う。

例えば国が環境省や林野庁を通じて自然を守るとか楽しみたいという人にそれなりの先進国としてのサービスを提供しているかというのとやってない。そんなにお金をかけずにやれることだってあるだろう。地域としてのルール作りも環境省も林野庁も関与しているのか。われわれも声を出して行って、行政も一生懸命やろうとしているね、それでできないところはガイド協会であるいは個人で手伝って行きましょうかと。今皆さんが美瑛富士でやろうとしていることは理想的な話であって、その前に一段階二段階現実的なことの必要があるのではないかと。いろんなところで行政をつついていくというのがあって、いろんな制度を使えばちょっとづつお金が出るんじゃないかと思う。環境省が美瑛富士避難小屋にトイレを作ってやるとそれを皆さんがありがたいことだと思うのは筋違いだと思う。国立公園でトイレがあるのは最低限、レンジャーの人手が足りないなら管理は手伝いましょう、しかし費用はきちんと計上して公園管理団体や市町村に補助金として渡すとかやり方はあるはず。純粋にボランティアとしてやられる前にそういったことをやったほうがいいのでは。それとあわせて携帯トイレの使用場所も地図にはっきり書いておくと携帯トイレを使うシステムができるだろう。そういう意味で個人としてではなく組織として自然保護に関わる国や都道府県の機関はまだ十分にやるべきことをやっていない。それはなにをやっていいのかわかってないから。なにをやって欲しいのかをこっちから言わなきゃダメなんですね。

(荻原：森林管理局)：林野庁には一般会計で国有林以外の森林をどうやっていくのかを指導する行政機関と特別会計で国有林を管理する機関である森林管理局・署があり、今は赤字

ですが木材を売った収入で自分たちの事業をまわすということで昭和22年からスタートしています。基本的には国有林というのは木材を生産する事業です。そのために必要な施設を作ってきました。例えばポロシリ山荘は実質は山小屋ですが作業員が休憩する小屋として作ってきました。ご存知のように木材の価格が安くなってしまっていて、血税をつぎ込まないとやっていけない。その中でも森林作りはやっていかなければならないので、森作りを生物の多様性も考えながら、今は森林の公益的機能を増やすという事で方針を変えている。森林を育てるための伐採をして収入を得ることもやるがどう育てるかもやっている。その中の一つとしてレクリエーションの森を指定したり歩道を整備したりしている。レクリエーションの森として指定されているところはバイオトイレも増えました。ポロシリについてはレクリエーションの森に入っていないのでトイレを作ることにお金をかけるのは難しい。かなりウルトラC的にやっている。皆さんの声が大きくなれば予算も取りやすいし対外的に説明しやすい。予算は誰が見ても納得できる使い方をしなければなりません。登山をする人より麓でキャンプする人が多いのでキャンプ場にお金をかけることになる。ここで山岳会も一生懸命動いている、要望もあるということなら説明がしやすい。ハコモノは国が作る管理は地元でというのは、地元が動いてくれたほうがお金が付きやすい。

(加藤教授) でも一方で国立公園の7割が国有林なんだから、林野庁が環境省にけんかを売ったらいいんですよ。自然公園を守っているのはどっちなんだと。そのお墨付きは国有林が伐採のためでなく国民の森にと法律が変わったことです。皆様の税金が入っているのだから麓から山の上まで気持ちのよい遊び場所を提供している、しようと思うのでとどんどん攻めていけば環境省も受けて立たなければならない。そういういい意味で自然保護とサービスの競争をしていけばいい。

(横須賀) 林野庁は広域的な国立公園の管理を充分やっていると思う。が、アピールしていない。

(加藤教授) 事故が起こりそうだから山に入れないじゃなくて事故が起こりそうな状況をなくすようにきれいに管理をしたほうが提供できますよ。

(山口) 何かお手伝いしたいと思って出てきた。一年に一回くらいならできる。

(鈴木) 美瑛富士のトイレ場は目にあまる。現実を考えると国が全面的にやるとは考えにくい。受益者負担ということを考えていったほうがいいのではないか。山岳会や連盟、ガイド各社に働きかけて分担する、利用料をという働きかけをしてもいいのではないか。

(藤井) : 山にウォッシュレットがあつて当然だ。

(不明) 皆さんの環境意識の高さが伝わりました。予算があつたとしても管理がうまくいかないということでコストがかからないトイレを考えていくことが大切だと思った。

(荻原) 国有林に入るときはかならず入林届に書いて登山して欲しい。

(横須賀) : 入林届は貴重なデータなので、皆さん書きましょう。

(加藤教授) 尾瀬のトイレは全部ウォッシュレットです。電力会社なので電気があるということと紙をできるだけ使って欲しくないということ。

(岩村) 皆さんから見たら遅々として進んでいないように見えるけれども少しずつ進んでいきたい。皆様のご支援をお願いしたい。

(以 上)